

マダン橋とマカン道 伝承の混同

戸田 有希乃

1. はじめに

沖縄には本土に比べ、心霊スポットが多く存在するといわれている。実際、現地の若者に聞き取り調査をしたところ、多くの若者が心霊スポットや幽霊・妖怪話、または自分の体験談などを詳しく語ってくれた。

事前調査で「真玉橋」という橋にまつわる伝承に興味を持った。女が人柱にされるという話なのだが、インターネットで調べたところ、その伝承の真玉橋は現在沖縄の心霊スポットのうちのひとつであることを知った。古い伝説の橋がなぜ現在の若者の間で心霊スポットとして噂されているのだろうか。現地で行った調査の結果から考察していく。

また、聞き取り調査を実施したところ、興味深い結果を得ることができた。「真玉橋の人柱」の伝承と「まかん道の逆立ち幽霊」との伝承の混同である。これは、事前調査の時点でインターネットの掲示板で発見していたのだが、現地の若者の間で現在生きた言葉として聞くことができたので、この2つの伝承の混同についても考察する。

2. 真玉橋の人柱

2.1 真玉橋の歴史と伝承

真玉橋は、沖縄県那覇市とその南の豊見城市との間を流れる国場川に架けられた橋である。1522年に木橋が架けられ1708年に石のアーチ型橋に架けかえられ、沖縄戦の際、日本軍によって一部破壊された。戦後は米軍によって鉄橋が架けられ石橋の部分が埋められ、2003年に現在のコンクリートの橋になった(写真1・2)。那覇と首里を結ぶ軍用道路として重要な橋であったが、昔も今も交通の要所であることは変わらない。



写真1 現在の真玉橋
(2007年9月4日撮影)



写真2 石橋の遺構
(2007年9月4日撮影)

この橋には「真玉橋の人柱」とよばれる伝説がある。多種多様な伝承が語られているが、ここでは例話をひとつ紹介する。

昔ね、真玉橋の話でね、七ムーティー（七色元結）というのがあった話を、お婆さんたちから聞いたよ。それで、親子が三人で暮らしてね、七ムーティーしている女の人が、あっちこっちの村を拝むのをやっていたらね。そしたらね、真玉橋は、いくら架けても流れて、りっぱに架からなかったらしいけどね。それで、その橋を造った人がね、「これは残念なことだ。どうしようかなあ」と言って、こう思っていたときにね、この七ムーティーしている女がね、通りかかったらね、「この橋はどうして架からないのかね、娘さん」と言ったので、「これはもう、ここに七ムーティーしている人を埋めないことにはね、この橋は架かりませんよ」と言った。それで、橋の近くを何かこう捜したけれど、七ムーティーの人は、いなかったんだね。もしやこの女が、七ムーティーしているかもしれないので、この女の人の髪の毛をみてみたらね、七ムーティーしていたんだね。このことが原因でこの人は、橋に埋められてしまうことになったんだけどね。その家には、親子三人だけど、女の子が一人いたんだね。それで埋められに行くときね、母親が娘に、「おまえはね、もう顔は美しいからいいけれど、人より先にものは言うんじゃないよ」と言って、別れて橋の下敷きになったんだね。

それで、父親と娘は、ここにはいられないとあって、何かあの山原のあたりに行ったんだね。そして、この娘が大きくなって、十七、八になってもことばを話さない。ことばを話さなくなったからね。それで、首里のこの橋の仕事を受け持っていたかしらの役人にね、父親が、「こういうわけだから、行ってからおわびをしなさい」と言ったんだけどね。役人が国頭まで行ったら海辺で、この女の子が遊んでいたんだって。「ああ綺麗な娘さんだなあ」と思ったがね。その娘は、ことばを話さなかったんだね。それで、「おまえの家は、どこなのか」と言ったらね、「どこのどこだよ」と身ぶりて教えた。「それじゃ連れて行ってくれ」と行くと、それから、連れて行かれたのは、その父親の家で、父親は、「こういうわけで、七ムーティーしていた私たちの家の家族でございます」と言った。「そうか、けどどうしてこんなにことばを話さないのか」と言うとね、「これは親が橋のところに埋められるときにね、『顔は人より優れていてもね、人より先にものは言わないよ』とあったから、それを守っているはずですよ」と言ったんだって。その役人の父親の言いつけでは、「おわびだからね。こういう女の子がいるから、この娘を嫁さんにしてきなさい」と言われたんだけどね。嫁にするつもりではいたが、これはことばを話さなかったらどうしたものかと、こう三人で考えていたんだね。そしたら、この父親がね、「おまえはね、母親のことを守ってからね、ことばを話さないはずだから、今からはね、おまえはこの人の嫁になって、出世するから、口をひらきなさい」と言った。それで、この娘はしゃべったんだね。この人はね、出世して首里に行ったんだって。

(『日本伝説大系』第15巻「真玉橋の人柱」伝承地：沖縄県那覇市首里石嶺
原典：那覇民話の会編(1980)『那覇の民話資料 第三集 真和志地区(2)』
那覇市教育委員会社会教育課)

真玉橋の人柱伝説の発祥を研究した中村史(1999)によると、この伝承は、本土で聞かれる「長良の人柱」の伝承が沖縄に伝播したが、沖縄本島では真玉橋が石橋に架けかえられる際に真玉橋の話に変わっていったものである。

2.2 沖縄芝居の影響

このような伝説「真玉橋の人柱」であるが、この伝承が沖縄芝居と関わりの深いことは先行研究で明らかにされている。沖縄芝居は明治維新後に組踊¹⁾が民間に伝播した結果、新たな素材をも取り込みつつ展開していった大衆的な演劇で、沖縄方言で上演される。戦後、1960年代頃からは映画やテレビに観客を奪われるが、1980年代には見直しの風潮となった。現在も定期的に公演されている。

そして、伝承の語り手の多くは過去に沖縄芝居を観ており、その影響から伝承は沖縄芝居とおおよそ同じ内容に統一されているということが指摘されている(中村1999)。

2.3 心霊スポットとしての真玉橋

真玉橋は、もともと人柱伝説が有名なのだが、現在沖縄の若者の間では心霊スポットとして知られている。伝説の中では犠牲者の女が幽霊になったり、人々に恐れられたりはしていない。では、なぜ若者たちは幽霊を連想し、真玉橋が心霊スポットとなったのだろうか。考えられる要因は4つある。

まず1つは、橋という場所の境界性にある。民俗学における境界性を提唱した宮田登(1982)によると、橋は2つの世界をつなぐ唯一の道であり、人の密集度も高くなる。そして、それぞれの世界の端でもあろうから、境としての認識も強いものがある。また、ある種の霊力がこもる空間であり、都市ではそれが人々の怨念や呪力となって、殺ばつとした事件を惹き起こすエネルギー源となっているようだ。

それに、神がかった話なので、霊的な空間として無意識に認識され、幽霊を連想したのではないか。

また、犠牲になった女の娘と父親が逃れたとされる国頭村の謝敷に2人の子孫と屋敷跡が今でも残っていると語られている。これが伝説にリアリティを与え、人柱は事実であったと思わせられたのだと考えられる。

さらに、2003年の架けかえ工事で、埋められた石橋の遺構が発見され、その時伝説中の人柱は出てきたのかと話題になった。実際人骨は見つからなかったが、人々の間では人骨が発見されたという噂が広まった。架けかえ工事での人骨騒動により、それまで伝説を知らなかった若い世代の人々にも知れわたり、事実であったと受け止められ、それが心霊スポットになったのではないか。これらの要因が真玉橋に幽霊を連想

させたと考える。

3. まかん道の逆立ち幽霊

3.1 逆立ち幽霊

「まかん道の逆立ち幽霊」は、もともと『琉歌全集』²⁾中の第2319の真心を裏切られた妻の亡霊が詠んだといわれる「月や昔から変ること無さめ、変て行くものや人の心」という歌をもとに作られた話である。大正初期に球陽座³⁾において渡嘉敷守良⁴⁾作『秋の空の口伝』が上演される。1968年(昭和43年)戦後の沖縄芝居復興に努めた沖映演劇⁵⁾が、琉歌と『秋の空の口伝』とを合わせて作った『まかん道の逆立ち幽霊』を恒例夏期特別怪談劇として上演する(沖縄企画部1974『沖映演劇』パンフレットより)。これが、現在沖縄の多くの人にとって馴染み深い「逆立ち幽霊」のストーリーである。以下に紹介する。

首里金城村の波名城真三郎という男が美貌の妻で、人情にも厚く隣近所でも評判者のマヅルが他の男に取られはしないかと風の音にも目を覚ますと云う明け暮れに、とうとう神経衰弱となり身心共につかれ果てて病の床についてしまったのである。そのことを伝え聞いた近隣の人々は美しすぎる妻をめとるのもよし悪しと、いろいろ話しに花を咲かせていた。

真三郎の悩みは一層激しくなり遂に危篤状態に陥ってしまった。ある日、真三郎は苦しい息の下からマヅルに向かって「俺はもう駄目だ、治る見込みとてなく死んでいく、お前は俺が死んだら再婚するだろうな、俺はそれを思うと残念で死んでも死にきれない」と泣いて訴える。それを聞いたマヅルは「何を仰有います、私は如何なることがあっても決して再婚などいたしません。そのような気弱いことを言わず、1日も早く治ってください」と強くはげます。真三郎は首をふって「お前は若くて美しすぎる。再婚せずと頑張ったところで世間の男が許すまい、又親兄弟とてそのまま捨ておかないだろう。お前を残して死ぬのが俺はたまらないと泣き叫ぶ。「お情けないお言葉、貴方が死ねば私ももるとも」といくら慰めても、はげましても真三郎はマヅルの真心の言葉を全然受けようとしないのである。

「私の美しいことが貴方にとってそれほどまでにご心配ならば、私の真心をお見せします」と庖丁を持ち出して自分の鼻をそぎ落してしまう。マヅルの顔からしたたる鮮血を見て驚いた真三郎は興奮のあまりマヅルにすがりついて泣きわめく。その事件以来、妻の真心を知った真三郎は不思議なことに症状も日増しに良くなり全快したのであるが、マヅルの二た目と見られない醜さに顔をそむけるようになった。

その折、真三郎は不図したことから遊女と恋仲になり、恩人とも云うべき妻になんくせをつけはじめ無情にも情婦と共に謀してマヅルを毒殺して墓に葬り去るが、死んでも死にきれないマヅルの亡霊は恨めしく真三郎とナビーにまとわりつ

くようになる。これに怒った真三郎は「マツルは足が自由に使えるから出歩くのだ」と死体の足を棺桶に釘付けし、寺社の護符を屋敷の角々に貼って恨みを封げんとするが、亡霊はそれにもこりず夜な夜なまかん道に現われ人々を悩ますのである。

これを伝え聞いた若き武勇者、池城里之子が亡霊を助けて仇を討たせると云う物語で、その亡霊の恩返しの導きによって池城はメキメキと出世し、光次館池城親方となり、亡霊から与えられた三匹の鯉が住む墓を得て、代々加門は繁栄したと伝えられます。（沖縄企画部 1974 『沖映演劇』パンフレットより）

さらに、1973年（昭和48年）、月刊沖縄社からカラー版『沖縄の怪談』という本が出版された。調査中、沖縄の図書館で本を読んだのだが、おどろおどろしい挿絵や現場の写真付き、そして表紙裏には沖縄の妖怪マップが載っていたため、非常に印象の強い本であった。この中には逆立ち幽霊の話も掲載されていた。

沖縄で特に「逆立ち幽霊」が有名であったのは、大正初期から昭和後期にかけてだと考えられる。



写真3 逆立ち幽霊（『沖縄の怪談』より）

3.2 逆立ち幽霊の内容

まかん道の逆立ち幽霊についての情報を集めるべく、ゆいレールおもろまち駅東の那覇市真嘉比で聞き取り調査を行った。話者には、知っている「まかん道の逆立ち幽霊」の話の内容や芝居との関わり、またまかん道は現在のどのあたりにあるのかを質問した。

話者の比嘉氏（94歳、真嘉比出身・在住）は17、8歳の時に高校を卒業してすぐに友人と当時人気の沖縄芝居「逆立ち幽霊」を観に行った。その時見た芝居の内容のすべてを覚えていないが、語ってくださった内容を以下にまとめる。

昔、ある夫婦がいたが、妻があまりに美人のため夫が妻を他の男にとられると心配していた。そこで、妻は自ら自分の鼻を削ぎ落とし、醜い顔になって、夫は安心した。しかし、夫は妻の醜い顔が嫌になったので、妻をいじめて別れ、他の女の所へ行った。その後、死んだ妻は逆立ち幽霊となって夫のもとに現れた。その妻の幽霊はでいごの木に逆さになってぶら下がっていた。

話者はその芝居を観た後、怖くなり走って逃げ帰ったという。今は戦争でなくなったが、当時でいごの木が古島からの真嘉比の入り口に実際存在していたので、本当に

幽霊が出ると信じていたが、実際に幽霊を見たという人は聞いたことがないという。

話者が芝居を観たのは今から 76～77 年前の昭和初期なので、おそらく戦前上演されていた『秋の空の口伝』を観たのだろう。『沖縄の怪談』の逆立ち幽霊の内容もでいごの木以外はほぼ同じであるが、幽霊が逆さになったのは動けないように死体の足を棺おけに打ちつけたためである。

沖映演劇の芝居の内容は序盤『沖縄の怪談』とほぼ同じだが、夫は女と共謀して妻を毒殺した点で異なる。

3.3 心霊スポットとしてのまかん道

このまかん道も沖縄の心霊スポットのひとつである。その伝承のとおり、「逆立ち幽霊」が出ると言われている。伝承の中で女が死に、すでに幽霊となって現れ、村の人々に目撃・噂されて恐れられていた。そのため現代でも幽霊が出ると言われても不思議ではない。

また、幽霊の復讐を助けた池城里之子の墓や子孫が今でも残っているとされているので、真玉橋同様、リアリティが増し幽霊を連想したのだろう。

さらに、話者玉城さん（60歳女性、前島出身・古島在住）によると、数十年前までまかん道沿いは墓地で、ススキが生い茂った細く急な坂道であった。まわりに民家や街灯がないため、夜は不気味な風景だった。しかし、現在は工事中で、墓地はなく広い殺風景な道になっているため、夜でもあまり怖いと感じないという。



写真5 工事中のまかん道
(2007年9月6日撮影)



写真6 まかん道 松島中学校付近
(2007年9月6日撮影)

4. 2つの伝承の混同

4.1 混同の事例

事前調査で真玉橋の幽霊についてインターネットで調べていたところ、一部で「真玉橋の人柱」の伝承と「まかん道の逆立ち幽霊」との伝承が混同されていることが分かった。この2つの伝承の混同というのは、真玉橋に逆立ち幽霊が出るという内容である。以下は伝承の混同が見られたブログ((1)(4))と掲示板((2)(3))を引用したものである。

(1) 掲載日 : 2002 年 11 月 25 日 タイトル : 真玉橋の逆立ち幽霊 !

真玉橋とは豊見城市と那覇市にかかる橋だ。

漫湖をまたいでいる。かなり昔、この橋な何度も何度も増水などで流されたそう
だ。

当時の役人が、ユタ (沖縄のいたこ) に相談したところ、「人身御供をたてない
といけない」となったそう。そこで当時の人達は、ある女性を選び、生きたま
ま逆さまにして埋めてしまった。それ以来、橋が流されることはなかったとい
う。しかし、その女性の幽霊が逆立ちして出るようになり、たびたび通行人に目撃
されていた・・・。なんと、その橋を渡った人の後を、逆立ちしてついてくる
そう (これは怖い !) しばらくすると消えてしまうということが、繰り返されて
いるそう。

(「お客さん日記」 <http://www.potaway.net/~dallin/tdiary/?date=20021125>)

(2) 投稿日 : 2004 年 8 月 14 日 投稿者 : 零円

あと、最近思い出したのですが、『逆立ち幽霊』って御存じでしょうか？沖縄の
真玉橋 (まだんばし) という橋に無理矢理人柱にされた女性が逆さ生き埋めにさ
れて、毎晩のように橋を渡る人間に逆立ちでついてくる、橋を渡りきると、橋に
はもう誰もいなくなっているのです。というお話。

真玉橋は 3 年ほど前に壊されて別の橋が出来ていますが。昔、そこで奇怪なもの
を見た人は少なくはないようです。

この話は、沖縄では結構有名なんです、お盆になると、舞台をしていたりしま
すよ。 (「妖怪探究」 <http://scene5.com/yokai/bbs/pslg2610.html>)

(3) 投稿日 : 2005 年 5 月 27 日 投稿者 : ちゅらさん

真玉橋の逆立ち幽霊

(「みんなが忘れていたことを思い出すスレ パート 6」 <http://www.machi.to/bbs/read.cgi?BBS=okinawa&KEY=1114838225&LAST=100>)

(4) 掲載日 : 2007 年 6 月 2 日 タイトル : 真玉橋

今はこんなにキレイな橋になった豊見城市にある真玉橋

真玉橋と言えば「逆立ち幽霊」が有名ですね～。

(「南の島のクルク民」 <http://curcuma.ti-da.net/e1594203.html>)

この伝承の混同が、現在の沖縄の人々の間で実際に起こっているのかを確かめるた
めに、現地調査では、沖縄県那覇市の沖縄大学の学生 9 名と、宜野湾市の沖縄国際大
学の学生 5 名、合計 14 名に聞き取り調査を行った。聞き取り調査では、真玉橋につ
いて知っている伝承や怪談、また、まかん道の逆立ち幽霊について知っていることを
聞いた (論文末の調査結果参照)。

この聞き取り調査から、興味深い結果を得ることができた。14名中3名が真玉橋には逆立ち幽霊が出ると答えたのである。逆立ち幽霊はまかん道に現れる幽霊なのだが、混同されて覚えられていた。事前調査でインターネット上で見られた伝承の混同が、現在の沖縄の若者の間でも起こっていることが明らかとなった。

以下に、伝承の混同が見られた話者3名の事例を挙げる。

[事例1] C氏 20代男性 那覇市首里出身

「真玉橋？知ってる、逆立ち幽霊でしょ」と自信がある様子で答えた。曖昧だが、祖父に聞いたというあらすじを説明してくれた。

ある夫婦がいて、妻が顔を怪我して醜くなった。夫は浮気し、妻を殺す。妻は逆さの幽霊となった。

他の話者に同様に聞き取り調査をしている時、C氏は話者に対し、「だから、それ、逆立ち幽霊だって！」と何度も主張していた。

[事例2] M氏 20代男性 糸満出身

「真玉橋って、逆立ち幽霊だっけ？」と自信なさそうに答えた。テレビで見たという。

[事例3] N氏 20代女性 糸満出身

はじめはわからないと言っていたが、途中で思い出してあらすじを説明した。

ある夫婦がいて、夫が出稼ぎに行くことになり、妻が美人で他の男にとられるのを心配したら妻が鼻を切り落とし、女が病気になり、夫が浮気して女が逆さに生き埋めにされて死ぬ、という内容である。

4.2 マダン橋とマカン道

真玉橋と逆立ち幽霊の伝承は、なぜ混同されたのだろうか。2つの伝承の共通点から推測してみた。

まず、名前が似ていることが原因のひとつだろう。「マダン橋」と「マカン道」、響きがよく似ているため、混同するのも無理はない。

次の共通点として、双方とも古くから語り継がれてきたキーフレーズが軸になった伝承であるという点が挙げられる。真玉橋の伝承は「ひとさきにものを言うな」という教訓の言葉が、そして逆立ち幽霊の伝承は「月や昔から変ること無さめ、変て行くものや人の心」という歌が中心となって構成されている。

そして、これらは沖縄芝居に取り上げられ、人気公演となり、沖縄芝居の代表作となった。また、どちらも女が死ぬ話なので印象が重なる。

さらに、これらはともに旧那覇の境界に位置している(図1参照)。まかん道は、那覇の空間構造の上で、旧那覇の市街地と首里地域との境界に位置する場所である。また、真玉橋は、那覇の市街地と市の南に展開する周辺農村との間の境界にあたる場所である。



図1 真玉橋とまかん道 (Google マップより)



図2 怪談「逆立ち幽霊」のまかん道の位置 (『沖映演劇』パンフレットより)

南の真玉橋は橋、北のまかん道は坂道である。橋や坂道は境界の地とされていて、恐ろしいもの、霊的なものが住み着いたり、出現したりするといわれている。

これらの共通した特徴は、2つの伝承を誤って記憶させ、混同を招いた要因となりうる。

4.3 「真玉橋」の「逆立ち幽霊」

2つの伝承が混同されたといっても、実は決まった方向でのみ混同されている。つまり、まかん道の逆立ち幽霊が真玉橋という場に侵出しているが、その逆はないということだ。では、なぜこのような形の混同となったのか、真玉橋とまかん道という場の観点から考えてみよう。

まず、「真玉橋の人柱」の場は一点に限定することができる。橋が架かる国場川は規模は多少変われども、川や橋の位置は石橋の頃からほとんど変わらない。しかも、「人柱」なので橋の柱という、限られた場所に伝承がおかれている。

それに対し、「まかん道の逆立ち幽霊」の場は、現在特定の場が定まっていない。まかん道は昔、首里と那覇を結んだ首里街道に平行した北側のルートであった。現在の安里から真嘉比を経て儀保十字路に向かう道である。この長い一本道がまかん道であるため、幽霊が出現する場が限定できない。それに加え、工事により現在は道が複雑になっており、ますます場の限定が困難である。さらに、ストーリー上、幽霊が現れた場所も複数ある。

これらを比較したところ、場においてはまかん道は弱く、真玉橋の方がより強いことがわかる。

次に、2つの心霊スポットとしての幽霊を比べてみると、圧倒的に逆立ち幽霊の方がインパクトもイメージも強い。真玉橋にはもともと伝承に幽霊が現れていないので、女の幽霊と言ってもその姿は想像しがたい。

一方、逆立ち幽霊はその名のとおり逆立ちしていて、鼻がそぎ落とされた恐ろしい姿が容易に想像できる。しかも、芝居や本などはその姿が描かれているので、直接沖縄の人々に強烈な印象を与え、逆立ち幽霊はキジムナー⁶⁾の次に知れわたっている。

真玉橋はより場が強く、幽霊が弱い。そして、まかん道は場が弱く幽霊がより強い。当然、場は移動不可能なので、幽霊が移動することになる。このことから、逆立ち幽霊が真玉橋に侵出した理由がわかる。

5. まとめ

今日若者の間で心霊スポットされている真玉橋とまかん道には沖縄芝居や本の影響が極めて大きいことが分かった。

また、真玉橋と逆立ち幽霊の伝承が混同されている現場に直面することができ、2つ伝承の混同の原因の可能性を導くことができた。これらの伝承は、おそらく今後も混同され続けるだろうが、テレビや本、インターネットなどのメディアからの影響を考えると、事態はますます複雑になるのだろう。

注

- 1) 球王朝時代の沖縄で向受祐・玉城親方朝薫が創始した、踊念仏・能・狂言をアレンジして発展した芸能の一種。台詞・音楽・舞踊の三要素から構成され、国の重要無形文化財に指定された伝統的な古典芸能。台詞は、八八八六からなる詞章を独特な抑揚で唱える。
- 2) 1968年(昭和43年)島袋盛敏・翁長俊郎著。「琉歌」とは奄美・沖縄・宮古・八重山諸島に伝承される叙情的短詩形歌謡の総称。「琉歌(りゅうか)」という言い方は和歌(大和歌)に対して区別するための琉球の歌または琉球歌という意味の呼称で、一般には「ウタ」という言い方がされる。
- 3) 1905年、第一次球陽座から始まり、1910年明治座『上の芝居』を経て1914年に第二次球陽座として花咲く。
- 4) 1880~1953年。『球陽座』『伊渡嶺劇団』などを経営。明治末年から昭和初期の沖縄の芸能に君臨した沖縄の演劇、舞踊の中心人物。
- 5) 1952年に映画の輸入と配給を主体に設立された『沖映』を、1965年に沖縄芝居の振興と改良を目的に、映画常設館だった『沖映本館』を演劇場に改造して沖縄芝居を上演するようになった。
- 6) 沖縄及び周辺の諸島で伝承されてきた伝説上の生物、妖怪で、樹木(一般的にガジュマルの古木であることが多い)の精霊。

参考文献

- 沖縄企画部(1974)『沖映演劇』(パンフレット)
佐久田繁(1973)『沖縄の怪談』月刊沖縄社
tommy(2007)『沖縄のうわさ話』ボーダーインク
中村史(1999)『沖縄・豊見城村の伝説「真玉橋の人柱」』『小樽商科大学人文研究』第97輯
福田晃(編)(1989)『日本伝説大系第15巻』みずうみ書房
宮田登(1982)『都市民俗論の課題』未来社

参考ウェブサイト

- 「お客さん日記」<http://www.potaway.net/~dallin/tdiary/?date=20021125>
ちゅらさん「みんながわすれていたことを思い出すスレ パート6」
<http://www.machi.to/bbs/read.cgi?BBS=okinawa&KEY=1114838225&LAST=100>
「妖怪探究」<http://scene5.com/yokai/bbs/pslg2610.html>
「南の島のクルク民」<http://curcuma.ti-da.net/e1594203.html>

「真玉橋」にまつわる伝承 若者への聞き取り調査結果

[調査概要] 2007年9月5日に、沖縄県那覇市の沖縄大学の学生9人と、宜野湾市の沖縄国際大学の学生5人に聞き取り調査を行った。真玉橋についての知っている伝承や怪談、また、まかんだの逆立ち幽霊について知っていることを聞いた。

A氏 20代女性 那覇市古波蔵出身

川の氾濫があり、ユタに「七色のくしの女性をいけにえに」と告げられ探す。しかしそのユタのかぶり物をとったら七色のくしをつけていたため、ユタが生け贄にされる。

夜橋を渡るなど言われている。

逆立ち幽霊の話は知らない。

B氏 20代女性 那覇小禄市出身(閉鎖的な町)

真玉橋の話を知っている。

橋の工事がうまくいかない時にユタが「つむじ3つある人を人柱に」と言い、当たる人を埋めた。

その犠牲者が幽霊として出る。

逆立ち幽霊の話は知らない。

C氏 20代男性 那覇市首里出身

「真玉橋？知ってる、逆立ち幽霊でしょ」と自信がある様子で答えた。曖昧だが、祖父に聞いたというあらすじを説明してくれた。

ある夫婦がいて、妻が顔を怪我して醜くなった。夫は浮気し、妻を殺す。妻は逆さの幽霊となった。

他の話者に同様に聞き取り調査をしている時、C氏は話者に対し、「だから、それ、逆立ち幽霊だって」と何度も主張していた。

D氏 20代男性 中城市出身

橋を架ける時、ユタが「七色の髪の人を人柱に」と言うが、当のユタが犠牲となった。

この話は祖母に聞いた。

E氏 20代男性 宜野湾市出身

真玉橋を知らない。場所も分からない。

逆立ち幽霊を知らない。

F氏 20代男性 宜野湾市出身

真玉橋を知らないし、読めない。

逆立ち幽霊を見たが、夢かもしれない。

G氏 20代男性 宜野湾市出身

真玉橋は全く知らない。

逆立ち幽霊は、父親が美人の足を釘づけにした。芝居で上演されていることを知っている。

H氏 20代女性 佐賀県出身 7年間那覇市在住

真玉橋の人柱伝説は知らないが、真玉橋にまつわる怪談を知っている。

国場川に死体が流れる。「夜歩かないほうがいい」と言われる。

逆立ち幽霊の話は知らない。

I氏 20代男性 福岡県出身

真玉橋は「人が川に埋まっている」ということを知っている。

橋のそばの居酒屋の隣に仏壇がある。

逆立ち幽霊は知らない。

J氏 20代男性 豊見城市出身

真玉橋といえば人柱の話で、幽霊はない。

橋をつくる、川の氾濫・崩壊、ユタ「虹色の髪飾りの人を人柱にすれば氾濫おさまる」、探す、町に当てはまる女がいた（そのユタとは別）、生き埋めに。

中学校でこの話を聞いた。

七回巻く髪のことを聞いたことがある。

人柱は噂だが、事実としてあったと思っている。

「真玉橋の人柱」の話は具体的に知っている。

K氏 20代男性 浦添市出身

真玉橋の話は全く知らない。場所も分からない。

L氏 20代男性 うるま市出身

真玉橋には「娘の命を助ける代わりに親が人柱になる」という伝承がある

M氏 20代男性 糸満出身

「真玉橋って、逆立ち幽霊だけ？」と自信なさそうに答えた。テレビで見たという。

N氏 20代女性 糸満出身

はじめはわからないと言っていたが、途中で思い出してあらすじを説明した。

ある夫婦がいて、夫が出稼ぎに行くことになり、妻が美人で他の男にとられるのを心配したら妻が鼻を切り落とし、女が病気になる、夫が浮気して女が逆さに生き埋めにされて死ぬ。